

おはなし六つ



(三)、おじいさん、おばあさん

お山の上に小さなおうちがあつて、おばあさんが住んでいました。

おばあさんは、お天気の日には、毎朝外に出て、お日さまのほうをむいて、たいそうをします。

「一、二、三、四、

一、二、三、四、」

ところがある朝、おばあさんはと

なりのお山にも小さなおうちがあることに気がつきました。

「おや、おや、あのお山の上にも小さなおうちがある。だれがいるんだらう?」

おばあさんはぼうえんきょうを持ってきて、のぞいてみました。

「あ、見える、見える。人がいる、おじいさんがいる。」

となりのお山の小さなおうちには、おじいさんが住んでいました。

「おーい、おーい。」

おばあさんが呼んでも、おじいさんには聞えないようです。きつと耳が遠いのでしょうか。

「おーい、おーい、おじいさんーん!」

やっとおじいさんに聞えたようです。おじいさんはこつちを見ました。

おばあさんは、

「おーい、おーい。」

といって手をふりました。

おじいさんも、

「おーい、おーい。」

といって手をふりました。

それから、お天気の日には、毎朝、おばあさんは、

「おーい、おーい、おじいさんーん!」

と声をかけました。

すると、おじいさんが小屋から出てきて、

「おばあさんよー、いい天気だねー。」

と答えました。

そして、ふたりはむかいあつて、たいそうをしました。

「一、二、三、四、

一、二、三、四、」

おばあさんはきれいなお花を作っていました。その花を山の下の村へ売りに行って、お米ややさいを買ってきます。

おじいさんは畑にやさいを作っていました。そのやさいを山の下の村へ売りに行って、たべものを買ってきます。

佐 田 桜

夕方、おばあさんが片手に花を持って、

「ヤッホー」

というと、おじいさんがくわをにぎった手をやめて、

「ヤッホー」

と答えます。

「ヤッホー」

「ヤッホー」

あるときおじいさんは、自分の作ったやさいかごにつめて、山をおり、となりの山をのぼって、おばあさんをたずねました。

「おばあさん、こんにちは。」

「おや、まあ、おじいさんですか、よくいらつしやいました。

さ、どうぞ、どうぞ。」

「おばあさん、これはおみやげです。たくさんたべてください。」

「それはどうもありがとうございます。さっそくいただきますしよ

う。」

おばあさんは、おじいさんが帰るとき、おみやげにきれいなお花をどっさりあげました。

おじいさんの持ってきたやさいは、どれもどれもたいへんおいしいやさいでした。

おじいさんとおばあさんはなかよしのお友だちになりました。

おじいさんはよくおばあさんのうちへあそびにいきました。おば

あさんもおじいさんのうちへお話しにいきました。ときどきふたりはえんがわにならんで、歌をうたいました。

「夕やけ小やけで日がくれて

山のお寺のかねがなる

……………」

× × ×

(四) だろぼう

きょうは日曜日、いいお天気です。たけしちゃんとふみえちゃんのおうちでは、みんなで動物園へ行くことになりました。雨戸をきちんとしめて、げんかんにしつかりとかぎをかけて出かけました。

おひるすぎです。げんかんのたなの上のこうもりがさが、戸だなの上のバスケットのかに話しかけました。

「なかなか帰ってこないね。」

「夕方になるかもしれないよ。」

「何かしてあそぼうよ。」

「ふたりじゃつまらないね。」

そのとき、てんじょううらで、

「わたしも入れてください。」

という声がありました。

だれでしょう？ ねずみさんでした。

てんじょうのすみっこの小さなあなから、こどものねずみがちよろちよろと出てきました。

「やあ、ねずみさんか。」

「いっしょにあそびましょう。」

「何をしようか。」

「しりとりはどう？」

いちばんさきにねずみさんが、

「ねずみ！」

といました。

こんどはビスケットのかんが、

「みつばち。」

こうもりがさが、

「ちくわ。」

といました。

「わさび。」

「ビスケット。」

「ともだち。」

そのとき、げんかんの戸をガタガタ動かす音がしました。

「おや、なんだろう？」

「だれかがげんかんのむこうにいるよ。」

「どろぼうかもしれないね。」

どろぼうでした。げんかんのかぎをいじっています。

「おい、どろぼうだぞ。」

「悪いやつだね。」

「ひどいめにあわしてやろう。」

どろぼうはガチャンガチャンとかぎを動かしていましたが、とうとうかぎをこわして、げんかんの戸をあけ、中にはいつてきました。

たなの上のこうもりがさが、

「よーし、やつつけるぞ。」

といて、げんかんにはいったどろぼうをポカンとなぐりました。

「あいたつ。」

と、どろぼうは大きな声をあげましたが、こわごわ中にはいり

ました。

すると、戸だなの上のビスケットのかんが、ビョンととびおりました。どすんと大きな音をたてて、どろぼうの足のところに落ちて、ガラガラッとこぼりました。

「わー！」

と、どろぼうがびっくりしてさげびました。

そのとき、ねずみさんがとんできて、どろぼうにとびついて、

鼻をガリガリツとかじりました。

「いたーい、助けてくれー。」

と、どろぼうは泣き声を出して、逃げていきました。

「行っちゃったよ。」

「よかったね。」

「おどろいていたね。」

たけしちゃんやふみえちゃんが帰ってきました。

「おやおや、げんかんがあいている。」

「かぎがこわれている。」

「だれか来たのかしら。」

「どろぼうはいったようだ。」

「足あとがある。」

「何かとっていったかしら。」

おとうさんもおかあさんもたけしちゃんもふみえちゃんも心配しました。

しかし、何もとられたものはありませんでした。

「ああ、よかった。だけど、どうして何もとらないで帰ったのかしら。」

こうもりがざとビスケットのかんが、

「そりゃわたしたちがおっぱらったからですよ。」

といましたが、だれにも聞えませんでした。

てんじょううらで、ねずみさんが、

「わたしが鼻をかじったから逃げたのですよ。」

とじまんすると、おかあさんは、

「あら、またてんじょうでねずみがないている。」

といました。

たけしちゃんやふみえちゃんは下にころがっているビスケットのかんをみると、

「きつとどろぼうが落したのね。」

と、かんをひろいあげました。そして、「ああ、おなががすいちゃった。」

と、いって、かんのふたをあけて、おいしそうにビスケットをたべました。

幼児の教育 第五十八巻 第七号

七月号 © 定価五〇円

昭和三十四年六月二十五日印刷

昭和三十四年七月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真

発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします。